

## 大学生にとって就職活動はどのような意味をもつか 2事例への半構造化面接調査から

著者	渡邊 悦子
著者別名	WATANABE Etsuko
雑誌名	東洋大学大学院紀要
号	54
ページ	343-362
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009716/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009716/</a>

# 大学生にとって就職活動はどのような意味をもつのか ——2事例への半構造化面接調査から——

文学研究科教育学専攻博士後期課程3年  
渡邊 悦子

## 要旨

就職活動は、大学生から社会人へと移行するためのライフイベントの1つである。学生にとって就職活動は、仕事を得る手段という意味しかないのであろうか。本研究の目的は、半構造化面接により、個々の大学生にとって就職活動がもつ意味を明らかにすることである。面接調査の結果、就職活動を行う中でたどる1) 学歴に対する考え、2) 親の存在と意味づけ、3) 自己イメージの3つの変化のプロセスが確認された。就職活動の開始前には、自分にとって困難で学歴重視のため不利であると受け止められていた。就職活動中は、様々な困難を経験しつつ自己と向き合う中で精神的にも強くなっている。時間の使い方も上手くなり、本当につきたい仕事は何か考え取り組んだ結果、最終的には希望の職種に内定が得られ、学歴だけではなく人柄も大切であると感じている。また、親の存在がプレッシャーかつ支えであるという両面的な意味をもつことや、社会から認められる自己への肯定感を獲得していた。語りを詳細に分析することにより、従来見えづらかった就職活動を通して生ずる変化のプロセスが明らかになった。

キーワード 大学生 就職活動 働く意味 キャリア教育 キャリア形成

## 1. 問題と目的

キャリアガイダンスが大学で義務化され、キャリア支援担当職員のみならず学生とかかわる教員もキャリア発達支援に関心ではいられない現状がある。

では学校から社会への移行に当たりは大学生には何が求められているのだろうか、新規学卒者正社員の採用選考に当たり重視した点（複数回答）についての回答（事業者割合）は、職業意識・意欲・チャレンジ精神82.9%、コミュニケーション能力67.0%、マナー・社会常識63.8%である（厚生労働省, 2014）。

つまり、企業が新卒大卒に期待する人材像は、組織で課題に取り組む「基礎力」のある学生である。その表現が人的資源管理へのコンピテンシー概念の導入により、「人柄」から、「主体性」「課題発見能力」「傾聴力・発信力」などの目に見えて育成可能な能力として表現されるようになった（独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2007）。

大学生の就職行動は、設置主体（国・公・私立）及び入学難易度毎に検討されてきた。濱中（2007）は、大学を設置者と難易度により、国立Ⅰ・私立A（いわゆる旧帝大など入学難易度の高い国立大学と私立大学で偏差値57以上）、国立Ⅱ・公立（地方国立大学と公立大学）、私立B（私立大学で偏差値56-46）、私立C（私立大学で偏差値46以下）の4つに類型化して分析している。そこでは、私立B・Cともに、大学の成績が良い者ほど、またクラブやサークル活動に熱心に取り組んだものほど内定を獲得することが示されている。正社員内定率と支援の関連についても検討されており、学校（先輩、学校の先生・職員・相談員）に相談した学生の内定率が高いことも明らかにされている（独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2007）。

萩原（2011）は、「大学入試難易度」が高い大学の学生ほど、「大学での成績」が良い人ほど、就職活動に成功していると指摘している。また、永野（2005）は「是が非でも就職を決めたい」という就職について強い意識を抱いた場合、就職活動に成功しやすいことを指摘している。就職決定の理由として、「熱意・意欲」という要因が最も強調されているのである。調査結果では強調されなかったが「大学での成績」や「ゼミ活動」、「サークルや部活」という大学生活の中心部分での活動も成功要因として挙げられていた。

佐藤（2016）は、内定の有無のような客観的な結果だけでなく、進路決定者に関しては、就職活動結果を自分自身ではどう思っているか、という主観的な評価も内定先の満足度の結果指標として重要となると指摘している。

上に挙げた就職活動について検討する論文は、質問紙法を用いて就職活動の実態解明をしたり、就職活動に関わる変数と「アイデンティティの確立」等の他の要因との関連性を検討した量的研究が多いのが現状である。しかし、「就職活動維持尺度」等を用いて量的に検討を行った軽部・佐藤・杉江（2015）は、就職活動継続経験が活動後の個人に及ぼす肯定的影響や効果については実証的に未検討であり、その後の社会人生活の適応を予測する指標との関連を検討することを今後の取り組むべき課題として挙げている。就職活動という経験が、個々の学生にとってどのような意味をもつ経験であるのか、「職を得るため」という表向きの意味を超えて、その経験の意味を問うことは、今まさに取り組む意義のある研究課題であるといえるであろう。そこで、本研究においては、大学生にとって就職活動の経験がどのような意味をもつのか、大学生の語りの分析により、その経験の隠れた意味を探索的に明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

4年制大学の文学部4年生で就職活動が終了し就職先が内定した学生3名に協力を依頼し、連絡が取れ同意の得られた2名を対象に半構造化面接を行った。事前の面識はなく、初対面での面接調査であった。面接協力者の概要は表1の通りである。

表1 協力者の概要

	Aさん	Bさん
性別	男性	女性
在籍課程	2部	1部
内定先	地方銀行	地方公務員
Uターン就職の有無	有	無

面接時間はそれぞれ40分程度で、大学院の教室を借用し、平成28年1月に個別に実施した。

調査手続きは、「大学生にとって就職活動はどのような経験か」というリサーチクエスションに基づき、インタビューガイドを作成し行った。面接内容は、協力者の同意を得て録音し、成した逐語録を分析資料とした。インタビューガイドの内容は次に示すとおりである。

表2 インタビューガイド

1. 就職活動をする前に、就職活動についてどのようなイメージをお持ちでしたか。
2. 就職活動で大変だったことは何ですか。
3. 就職活動をしていて、嫌だったことは何ですか。
4. 就職活動をして、失ったものは何ですか。
5. 就職活動をしていて不安を感じるのは、どのような時ですか。
6. 就職活動をしていて、一番心に残っていることはどんなことですか。
7. 就職活動をしていて、よかったと思えることは何ですか。
8. 就職活動をして、自分が成長できたと感じたことは何ですか。
9. 就職活動の経験は、今後の人生に何か影響を与えますか。
10. あなたにとって就職活動とは、どのような経験でしたか。

本研究では、大学生の就職活動の語りを次の手順により質的に分析した。1) 協力者の半構造化面接から起こした逐語録を繰り返し読み、2) 就職活動経験の意味づけに関わると思われる語りの部分を切片として取り出し、3) 語りを端的に表すコードを付与した。4) 類似のコードをカテゴリーにまとめることを繰り返し、5) 析出したカテゴリーの相互関係を時間の流れに沿ってまとめ直し、大学生にとって就職活動がどのような経験であるのかを考察した。

倫理的配慮として、協力者には個人が特定されないように配慮することを約束し、結果は論文にして発表する可能性があることを口頭にて説明し同意を得ている。

### 3. 結果・考察

語りを分析した結果、表3に示すように、就職活動の意味づけとして〈自分にとっての困難〉・〈自己成長の自覚〉・〈価値観の変化〉・〈家族関係の再考〉・〈新たな信念の獲得〉の5つのカテゴリーが、そして、就職を支える要因として〈家族の支え〉・〈就職への熱意〉・〈人生の岐路という認識〉の3つのカテゴリーが得られた。以下、得られたカテゴリーについての説明を提示する。尚、〈 〉内はカテゴリー、【 】内は概念コード、□内はインタビューにおける語りの引用であることを示し、語りの中で特に重要な意味をもつと判断された部分には下線を施した。

#### 3-1. 就職活動の意味づけ

##### 1) 〈自分にとっての困難〉

本カテゴリーは、【就職難】、【学歴重視の風潮】、【親からのプレッシャー】、【就職活動によるお金の必要性】、【就職活動スキルの不足】、【不合格による焦り】、【学歴コンプレックスの強化】、【時間の無さ】、【マイナス思考】、【就活（情報戦）イメージの揺らぎ】の10の概念コードから構成され、いずれも就職活動が本人にとって大きな困難であることが示されている。

就活する前は、ニュースで見ると就職難【就職難】みたいな感じで、いい企業とかに就職するのは、ほとんど難しくて【就職難】、ってイメージがありましたね。する前は、大手とか、あと何か学歴がほとんど【学歴重視の風潮】というか。そういうイメージは、最初がありました。（Aさん）

「他の人、あの就職の活動記みたいなのが大学から配られた時に、何か50社位エントリーしたとか、後、何かES（筆者注：Entry Sheet；エントリーシートの略）を30枚書いただとか。お話聞いていたので、まあ私は公務員だったのでそこまでしなかったのですが、普通の人は大変なんだなと【就職難】。（Bさん）

「就職難」、「いい企業に就職するのは難しい」、「普通の人（筆者注：一般企業就職希望者）は大変そう」との就職活動一般へのイメージが語られている。これらは実際に自分が就職活動を始める前に、人づてや大学配布の冊子、マスコミなどから入手した情報から形成されていることも語られていた。そして、語られるイメージは決して明るいものではなく、労力の大変さもさることながら、学歴や能力などにおいて自分が就職戦線の中で不利な立場にいるのではないかと自信の無さと不安へとつながっていると考えられる。

また、【親からのプレッシャー】のように就職活動を始めることで感じられる気づきもあ



表3 就職活動の意味づけと就職を支える要因

就職活動の意味づけカテゴリー	概念コード	カテゴリーの説明
自分のとっての困難	就職難	ニュース等から抱いた就職は厳しいという一般的なイメージ 語り例)「就職難で難しいイメージを持っていた」
	学歴重視の風潮	学歴重視の社会であるという思い込みと、在籍大学では不利になるとの不安 語り例)「大手は学歴も求められる」「頭いい人ばかりでビックリしました」
	親からのプレッシャー	親の思いによるプレッシャー 語り例)「親の自分と同じ職業について欲しい思いを感じる」
	就活によるお金の必要性	就活にお金がかかるという現実 語り例)「試験のためにアルバイトを制限、又はできなくなる」「試験の為に交通費が必要になる」
	時間の無さ	学業と就活を両立させるにあたり感じた時間的切迫感 語り例)「講義も受けないといけない」「Uターン就職だと地元に戻るのに時間がかかる」
	就活スキルの不足	就活に必要なスキル不足の自覚 語り例)「PCでのエントリー方法等がわかるまで、ストレスを感じる」「自分の言葉で話すのが苦手」
	不合格による焦り	思うように就職が決まらず就活が長引くことから生じる焦り 語り例)「長引けば長引くほど、もう焦りというか時間無い、時間無いっていうのが凄くあって」「一次試験を落ちてなかなか先に進めない」
	学歴コンプレックスの強化	面接官の問いかけ等から再確認された自分自身の中にある学歴コンプレックス 語り例)「学歴フィルターのようなものがあり、見下されているように感じた」「二部の学生である」
	マイナス思考	不合格という結果、就活の長期化により生じる自尊感情の低下 語り例)「試験に落ちてると負の情報しか入ってこない」「楽しい時間が持てない」
	就活(情報戦)イメージの揺らぎ	事前情報と現実の違いからの就活のイメージに対する変化 語り例)「説明会への参加は関係ないと言われていたが、実際には名前を覚えていてなど無関係とは感じられないことがあった」「説明会だと思って行ったら面接だったが、合格した」
自己成長の自覚	面接スキルの向上	面接に対峙する際の自分自身の変化 語り例)「人前で自信をもって話すことができるようになった。」「自信をもって臨み、自分らしきを出せるようになった」「自身の面接態度の変化が感じられる」「自分を見直す機会となった」
	自己肯定感の高揚	困難と向き合うことで感じられた自分自身の変化 語り例)「プレッシャーが自信に変化し、やる気を生み出す」「精神的に強くなる」
	時間の有効活用法の習得機会	限られた時間の使い方とストレスを溜めない時間の使い方 語り例)「息抜きとか休むときは休んでやるときはやるっていうにメリハリ」
価値観の変化	就きたい仕事の発見	漠然とした希望から具体的かつ焦点化された職業選択 語り例)「親と同じで安定しているからではなく、自分がその仕事をしたい」
	学歴コンプレックスの矮小化	学歴重視という思い込みに生じた変化 語り例)「公務員は学歴に関係なくスタートは同じ」「二部であることも関係ない。学歴だけでなく人柄もみられている」
	肯定的な人生観	就職活動に取り組む中から見出した人生の明るい展望 語り例)「強く望みを持つことが力となる」「本当に手に入れたと思えば叶う」
家族関係の再考	家族役割の変化への気づき	支えられる立場から支える立場への家族役割の変化への気づき 語り例)「父が来年定年になる」
	親への敬意	家庭内での存在感と社会人の先輩としての親の凄さの実感 語り例)「前から尊敬していたんですけど、もっとするようになった」「父って凄かったんだ」
新たな信念の獲得	就職活動の肯定的評価	就職活動開始前の困難なイメージからの転換 語り例)「プラスでしたね、これは絶対プラスです。マイナスはなかったですね」「結果がよければ、全てよい経験」「失うものは何もない」
	社会人としての自覚と責任感の芽生え	学生と社会人の境目にいるという認識 語り例)「責任感を最近凄く感じる」「社会人になる準備」「社会人としてのルールとかもこういう機会でないかと学べない」「学生から社会人の境目というか一番人生の左右される大事な時」
就職活動を支える要因カテゴリー		カテゴリーの説明
家族の支え		自身を支えた家族の言動 語り例)「父のくれるアドバイス」「母は肯定してくれた」
就職への熱意		安定した仕事や生活への思いと希望 語り例)「お金に困る生活はしたくない」「大企業に就職したい」「結婚しても出産しても働ける」「ずっと働ける仕事」
人生の岐路という認識		これから先の人生が決まるという切迫感 語り例)「就職はこれから先の人生を決定づける」

った。

正直親からのプレッシャーとかも、まあ自分が勝手に先走っていただけかもしれないですけど。地元に戻るってことは決まっていて、親に帰ってこいと言われて（…中略…）。父は口に出していなかったんですけど、多分銀行に入って欲しかった。終わってから言われて。銀行に入って欲しいみたいな。【親からのプレッシャー】（Aさん）

親が自分の就職先に期待を持っていることが、就職活動をしている人にとってプレッシャーと感じられていることが語りから伺われた。

次に示すように、お金と時間に関する現実的な困難についても語られていた。

東京から地元を行ったり来たりするのが凄いい大変でした。時間、費用もかかるし。だから夜行バスで往復して節約なんかして。まあ交通費出るところもあるんですけど出ないところがほとんど。生活費を稼ぐためにバイトもしないといけないのにできなくて、ちょっと休んだりして【就活によるお金の必要性】。Uターン就職で、行ったり来たりするのが…。レポートとかも結構あるじゃないですか大学って。それをしたり、就活の対策やエントリーシートを書いたり、説明会に合間をぬって行ったり【時間の無さ】。（Aさん）

5月から、給料も入ってこないし。交通費は全部自己負担ですね。試験が進めば進むほど嵩むけど、結局落とされると、もう何だったんだろうこの交通費みたいな【就活によるお金の必要性】。特に卒論が12月初め提出何ですけど、11月まで決まらなかったの。…もう焦りというか時間がない、時間がないっていうのが凄くあって（…中略…）。時間もお金も感情も失っている気がした【時間の無さ】。（Bさん）

就職活動をすることで、今までは学業とアルバイトの両立をしていた生活のパターンが変化する。アルバイトによる収入が得られなくなる、就職試験を受ける回数が増えると交通費が必要となる、また不合格となることで費やしたお金に対する喪失感が増している。自分の予想より就職活動が長期化することによるお金の必要性も感じていた。生活のパターンの変化は時間の使い方にも影響し、学業と就職試験とを両立する時間がないと感じていた。就職活動をする前の予想を超える、時間とお金の必要性をひしひしと実感していた。

さらに時間とお金といった物理的なものだけでなく、スキルの不足についても語られていた。

私自分はあまりパソコン、そんなに得意じゃないので…。そういうのになるとちょっと面倒くさいと思ったり【就職スキルの不足】。(Aさん)

私、そこまで思っていなかったんですけど自分の言葉で話すのが結構苦手なんだった。就職の面接を通じて思って【就職スキルの不足】。(Bさん)

就職活動を始めたことで、試験のエントリーに必要なパソコンが得意でない、面接で自分の言葉で話すことが苦手等、就職活動に必要な能力が不足していたことに気づかされている。就職活動を始めることによって必要な能力と、今まではさほど気にならなかった自分の能力とのギャップに気づくことにつながっていた。

その他にも、これまで述べてきた以外に就職活動に対する負の経験が語られている。

一次試験を通らないと面接に行けない…。一次切りの時が、始まりの時期に結構ずっとそれがあって、辛い時期だった。多分20個以上受けています、試験だけでも(…中略…)。失敗できないってプレッシャーもあるし、あの妥協したくないっていうのもありましたし、そういう意味ではもうかなりダメだった時の挫折というか、んー敗北感というか、かなりでしたね。周りが早期に決まっていくな人が多かったので、中々内定もでないまま続けている身としてはいいなあ、勝ち組だなんていう風に憧れみたいな気持ちもありました【不合格による焦り】。(Bさん)

二部っていうのも凄いなって言うんですか、プレッシャー。(…中略…) 二部って言うと何か悪いんですけど、いいイメージないだろうと思っていて一個目内定をもらったところは二部って言わないで内定もらったんで、もし二部って言っていたらどうなっていたんだろうと思います【学歴コンプレックスの強化】。(Aさん)

「何々大学の誰々です」って挨拶するときに、あっ、「この大学頭良い人」って思うと、ちょっと自分の中でも自信が無くなっちゃったりもするし、なんでその大学に決めたのって凄く突っ込まれると(…中略…)、何か見下されているなって、何でこの大学じゃなくて、この大学にしたのみたいな凄く突っ込まれ方をしたので見下されているような感覚には、なったりしましたね。(…中略…) 学歴フィルターみたいなのが、何かちょっと、見下されているのかな。じゃないですけど、なった時はありましたね【学歴コンプレックスの強化】。楽しいことを考えようと思っても、試験に落ちていると負のことしか入ってこない。楽しい時間が持てない。自分は負け組なんだと感じる【マイナス思考】。(Bさん)



内定が得られず就職活動の長期化による「焦り」が生じている。他の就職試験受験者の出身大学と自分の在籍する大学のステレオタイプな社会的評価の違いから、挨拶しただけでも感じる敗北感がある。さらに面接官の言葉により【学歴へのコンプレックスが強化】されている。内定が思うように得られないまま就職活動を継続することは、日常生活においても楽しいと思える時間が無くなり【マイナス思考】にとらわれてしまう。負の思考の連鎖を断ち切れない中に身を置くことで、自分自身に自信が持てず負け組だと感じている。勝ち負けという表現が、インタビューの中では筆者の耳に残っている。就職が決まれば勝ち組で、決まらずにいると負け組と、勝ち負けで表現するのは2人に共通していた。

このように就職活動開始時の経験はマイナスの語りが多かったが、就職活動する中で自分が就職活動に対して抱いていた思いが、実際には異なっていた経験が語られていた。

個別説明会って言われて、実際はその場で一次試験ですって言われて準備とか全然してなくて。他の一緒に受ける人と話す機会があったんですけど、毎年そんな感じだから準備してきたって言って。あっ、やっぱり情報不足だったんだなと感じました。そこが内定もらったところなんですけど【就活（情報戦）イメージの揺らぎ】。（Aさん）

就職活動は情報戦でもあると考えていたが、実際に活動すると違うのではないかという思いの芽生えが感じられている語りである。説明会と思っただけで試験であったが、それは例年のことで情報を得ている人には既知のことであった。ただ知らなかったことが必ずしもマイナスに作用することなく、その時に受けたところから内定を得ている。つまり情報不足が結果的に不利な条件とならなかった。就職活動においては、情報収集がその後の結果を左右する要素だと思い込んでいたのが実際には違っていた。このように当初抱いていた就職活動のイメージに揺らぎが生じていた。

## 2) 〈自己成長の自覚〉

就職活動を通して、自己の成長が自覚されたことが示されている。このカテゴリーは、【面接スキルの向上】、【自己肯定感の高揚】、【時間の有効活用法の習得機会】の3つの概念コードから構成されている。

あの先程も言ったやっぱり学歴のことが一番心配ではあったんですけども、何か逆に別にもう話していたらどうにでもなれ、ではないですけど、ちょっとやけくそになりながらやっていた部分はあったので、まあそういう意味では捨てきったことで、こう、清々しさを出せたから、いい印象を出せたのかなとも面接のときは思いましたね。（…

中略…）（教育実習で）教師として教壇に立つって機会を得て、ちょっと人前で話すことに抵抗がなくなったのもあって（…中略…）、少しは緊張を和らげて話せるようになったかなと思います。【面接スキルの向上】。（Bさん）

学歴が心配であったが、就職活動での面接を重ねる中で学歴のことは気にならなくなっている。面接に対しては、良い印象を出せるようになったと感じ、人前で話すことへの抵抗感の軽減や緊張が少なくなったなどの語りから、面接に臨む際の自己の態度の変化を認めている。最初の頃は自分の言葉で話すことが難しかったのが、面接スキルが向上し自分自身でも良い印象につながっていると認識している。

こうした、活動する中での就職スキルの向上は、【自己肯定感の高揚】にも関連していると思われる。

精神的にはまあ強くなったな、とは思います。凄いプレッシャーを感じました。終わってみれば今度は自信がついてきたので、まあ良かったかなと思います（…中略…）マイナスなことは何もなかったです。結果が良ければ全て良い経験だと思います【自己肯定感の高揚】。（Aさん）

粘り強さというか、下からでも這い上がる力というか、そういう根気強さっていうのは、改めて蓄積というか伸ばすことができたかなと思います。（…中略…）もう本当にいろいろな意味のピークでしたね。あの嬉しいもそうですし、どん底の方もピークですし。どっちも経験できたのが良かったかなと思います、結果的に【自己肯定感の高揚】。（Bさん）

困難やプレッシャーを感じつつ就職活動を継続しやり抜いたという経験から、精神面で強くなり、プレッシャーにも押しつぶされなかった自分に対して自信が持てるようになっていく。困難と感じられることに向き合ったことで、自分自身が成長したと感じていることが伺われる。就職活動中に経験した辛い思いとも前向きに向き合うことができているのは、Aさん・Bさん共に希望する就職先から内定を得られたという事実が影響していると考えられる。

困難と向き合うことは、スキルの向上や自己肯定感を高めるだけではなく、困難と上手く対処する力の獲得につながっている。

4年生の前半はちょっと忙しくって学校の単位の結果を残してしまっただけで、その中でも就活がある、テストがあったり、バイトがあったり。でもその忙しい中で時間をみつけないと有効に使えないっていう状況に陥ったんですけど、以前より時間の使い方が上手く

なったと思います。(…中略…) 休む時は休んでやる時はやってというメリハリ。そうメリハリがないと本当にやっていけないとすごく感じて (…中略…) 大学入って自由になった分だらけていて、就活してやっとなにか気づけたのも良かったかなと思って【時間の有効活用法の習得機会】。(Aさん)

Aさんからは、就職活動を始めてからの時間の使い方に関する変化が語られている。Uターン就職のために就職活動をするには時間の使い方が大切になると気づき、自身の行動変容の必要性を感じ、時間の有効活用に向けて自らの行動を意図的に変えていったことがわかる。

### 3) 〈価値観の変化〉

語りから就職活動をする中で価値観の変化が起き始め、就職先が内定し、その変化がより強固なものとして定着したことが伺える。この中で3つの概念コードが抽出された。

最初は、就活しているときには特に業種を絞ってなくて、希望はなくて。地元でトップ企業ならいいなと思っていて。でも、就活やっていくうちに、結局就活中に、何かお父さんも銀行なんですけど、何かお父さんと同じっていうか同じ銀行業界に行きたいなって思って。それで、そうですね、最初は、銀行は凄い給料もいいからという理由で選んでいたんですけど。でも、本当に行きたくなくて。その給料以外の面でも、ちょっと行きたくなくて。まあそんな感じです【就きたい仕事の発見】。(Aさん)

Aさんは就職活動を始めた頃は、地元のトップ企業であることのみを要件として、業種は絞らずに活動していた。漠然とトップ企業を目指していたのが、就職活動をする中でどのような業界の仕事をしたいのかを自身の中で明確化している。職業選択の基準が、地元のトップ企業は給料がいいということから父親と同じ業界で働きたいことへ、すなわち、外発的な動機づけから内発的な動機づけに転換している。地元に戻ることに関しては一貫しているが、業種に関しては漠然とした思いから、明確な目標と強い思いを持つように変化してきている。このことが、更なる就職活動への意欲となったと考えられた。

また自分の仕事に対する考え方のみならず、学歴や、より広く捉えると人生に対する考え方も大きく変化していることが伺われた。

今の銀行は、書くところがあって夜間、それはちゃんと夜間って書いたんです。そこは何か逆に働きながら勉強して凄いね、みたいな感じで悪い評価でなかったので良かった。企業によってはもしかしたらマイナスイメージだったり、もしかしたらプラスのイメージだったりみたいな感じ。夜間で、って不安は正直就活する前はかなりありました。(…

中略…) 学歴だと思いますよ。いざ面接行くと頭いい人ばかりでビックリしました。(…中略…) 結局人柄重視の面もあると思いますけど。あるところまで行ったらそうかもしれない。バランスの取れている人が、人柄とか。多分、わからないですけど【学歴コンプレックスの矮小化】。今思えば凄い良かった経験 (…中略…) 望みが叶ってよかったですね。多分自分に負けていたら多分ないなと思って。凄いハラハラしてて、よくあの時頑張れたなっているのはあるんですけど、でもまあ自信になったので。(…中略…) 本当に、本当に欲しいものがあると頑張る (…中略…) マイナスはほとんど無い、無かった気がしますけど。マイナスだったかな、まあマイナスは無かったですね、全く【肯定的な人生観】。(Aさん)

面接で、何でその大学なのと突っ込まれて見下された感じがした。でも結局そこは全部通過したので特に意味はなかったというか、信念があれば大丈夫だったと思う。(…中略) これだけは入れてください。公務員は学歴に関係なくスタートは同じです【学歴コンプレックスの矮小化】。(Bさん)

学歴に関しては、就職活動前から就職活動開始後も継続して学歴（出身大学）重視イメージを持ち続けている。しかし就職活動を終え振り返ってみると学歴、特に2部の学生であることはマイナスではなくプラスのイメージで採用者に捉えられることもあると気づいている。試験の面接で質問される内容が自分の在籍する大学のことであり、自己のコンプレックスもあり見下されたように感じていたが、実際には合格したことから自分の大学が低く見られているのは思いこみであったと認識が変化している。また面接では「頭のいい大学の人」が有利で引け目を感じる、というような発言もあり、学歴重視イコール自分に不利との思いを完全に払しょくしたわけではない。しかし、学歴が全てではなく人柄も重視されていることを実感している。つまり、学歴は一義的な大きな意味をもつと思っていたが、いくつかある要因の1つに過ぎなかった。また、公務員試験においても在籍校がどこかというのではなく、どの大学に在籍していても就職試験のスタートは同じであるとの認識を持つように変化している。希望する就職先からの内定を得ることで、いままで自信を持てずにいたことも肯定的に受け止められるようになっている。就職試験を経験し内定という結果を得ることで肯定的な受け止めが可能となりつつあることが示唆された。学歴重視の思いに揺らぎが生じ、自分の選んだ大学を肯定的に受け止められるよう変化することで、学歴重視という思いが相対的に小さくなってきている。

本当に欲しいものがあれば自分に負けることなく取り組むことができ、良い経験をしたとの振り返りをしている。強く望みを持つことが力となり、本当に手に入れたものを手にすることになると感じている。

#### 4) 〈家族関係の再考〉

就職活動をする中で感じた家族への思いの語りから2つの概念を抽出した。

私が就職して来年ちょうど父が定年なので、そうするとやっぱり余裕がないというか【家族役割の変化への気づき】。(Aさん)

Aさんは、父親が定年を迎える、という今まで考えてこなかった父の社会人の役割が終わることを意識している。そのため自分の経済的基盤をしっかりと築かないといけないという思いが強くなっている。家族に支えられていた自分からの脱却と、自分が家族を支えるという家族役割の転換を感じていることが伺える。

心に残っているというのは、やっぱり、何か自分の勝手なあれなんですけど。結局は何か父親の背中を見せてもらったっていうか、何か父親に結構憧れを持っていたんだなって思っ。凄く感じました。社会人の先輩で身近にいるのは父親なんで。父親に結構アドバイスとか受けていたりして、で、それでまあ父とは元々仲が良かったんですけど、何だかどんどん尊敬。前からも一応尊敬していたんですけど、もっとするようになって【親への敬意】。(Aさん)

身近にいる社会人としての父親の後ろ姿を見て尊敬していたが、先輩社会人としての父親からの助言の適格性、その後ろ姿が自分の憧れの社会人像であることに気づくことによって、さらに同じ道を歩みたいと思うようになる。これは、特に同性の親である父親への尊敬の気持ちが強化されたと推測される。

#### 5) 〈新たな信念の獲得〉

就職活動を経験し、希望する就職先から内定が得られ、Aさんは内定式も終えた時点についての語りから2つの概念を抽出した。

(就職活動は自分にとって) プラスでしたね。これは絶対にプラスです。マイナスは何もなかったですね。(…中略…) 失うものは何もない【就職活動の肯定的評価】。就活ってホント自分の位置的にはなんて言うんですかね。学生から社会人の境目っていうか一番本当に人生の多分左右される大事な時期だになってというのは凄く感じました【社会人としての自覚と責任感の芽生え】。(Aさん)



終わりがよければ、人生の良い経験【就職活動の肯定的評価】。社会人としてのルールを学ぶ場、そういう場に向けて準備するのは最後の機会かな、と思うので良かった【社会人としての自覚と責任感の芽生え】。(Bさん)

両名は就職活動について、当初はお金や時間、感情を失っていると否定的に感じていたが、就職活動を終えて振り返ってみると、「失うものは何もない」と述べている。ひとつのことに取り組む力と諦めない自分の姿に気がつき、むしろ良い経験であったと感じている。さらに就職活動は「学生から社会人との境目」との認識から「社会人としてのルールを学ぶ場」として捉えられ、社会人としての責任感を感じる契機となっている。就職活動を経験し、希望する就職先から内定が得られたことで、経験がより肯定的に受け止められていると思われる。社会の洗礼を受け辛い思いをすると同時に自己を認めらる経験も併せてしたことで、社会の中に自分が受け入れられる扉を開いている。肯定的に就活経験を受け止めることで、今後の生き方にも影響を与えていくと考えられる。

### 3-2 就職活動を支える要因カテゴリー

本研究における就職活動の意味づけだけでなく、自らの就職活動を支えている要因も明らかになった。就職活動を支えているものについての語りから、〈家族の支え〉、〈就職への熱意〉、〈人生の岐路〉という3つのカテゴリーを抽出した。

#### 1) 〈家族の支え〉

父は学校の成績と仕事の成績は違うから大丈夫だ、頑張れと言っていて。それでまあやっていた。(…中略…) 家族の支えもあって多分内定がもらえたと思います【家族の支え】。(Aさん)

母親は肯定的だったけど、父と兄は凄いいい印象ではなかった。楽な仕事で給料安いみたい。でも自分の信念を持っていたので変えることなくいきました。(…中略…) さらに、はねっかえりが強くなった気がします【家族の支え】。(Bさん)

Aさんは、社会人として身近な存在である父親からのアドバイスが支えとなり、「家族の支えがあって内定がもらえたと思います」と語っている。家族の支えが就職活動を支える要因としてはっきりと意識されているようである。Bさんは同性の親は肯定的であったが、父と兄は選択した職業にいい印象をもっていなかったという。Bさんは家族全員ではないが一部家族に支えられていると認識していた。いずれにしても、就職を支える要因として、改め

て家族の支えが認識されている。

特筆すべきは家族に関する語りに、同性の親と異性の親兄弟との間に差異がある点である。異性の親兄弟は必ずしも本人の就職活動の支えになっていないけれど、そのことを自分の意思を固め前に進む力としていると考えられる。賛同を得られることだけが本人の意思を支えるわけではない。就職活動において、反対されることが逆に支えとなることもあると示唆された。

## 2) 〈就職への熱意〉

一般に就職活動においては熱意が必要であるといわれているが、本研究においても就職に強い熱意を持ち続けることで、自分の人生が拓けることが示唆されていることが語りの中でも改めて確認された。

もし落ちたらっていうのを考えていて。もし落ちたら自分はその（お金に困らない生活）生活ができないんだって思って、プレッシャーをもらったり。（…中略…）まあ、地元で暮らそうと思っていたので。けど、やっぱり落ちた時とか凄いのかな。なんて言うのかな、生活が厳しくなったりすると、やっぱり社会人になったらやっぱり正直お金の苦労はしたくないというのがあって。正直な話、地元の上の企業には入りたいって気持ちもあって【就職への熱意】。（Aさん）

結婚しても出産しても働ける、長く働ける仕事、やっぱり安定なんですかね。そういう何かずっと働ける仕事ってイメージが市役所は強くて。長く働けるって意味では市役所がいいかなって結論付けました。（…中略…）就職浪人してもいいから後悔の無いように全部やろうと思って…【就職への熱意】。（Bさん）

就職活動は、就職の内定が得られるまで続く先の見えない取り組みであり、時には気持ちが萎える取り組みである。その中で、「お金の苦労はしたくない」、「お金に困らない生活をしたい」ので、地元のトップ企業に就職したい、長く働けて安定した仕事につきたいから、就職浪人も覚悟するという強い意思が語られている。このような就職への熱意というものが、両者の就職活動の継続を支えていたと考えられる。

## 3) 〈人生の岐路という認識〉

大学は4年間だし、あと就職活動につながるって言っても自分の努力次第でどうにかなるっていうのがあるんですけど、就職活動っていうのは言わば60歳くらいまで定年まで

最後の働く、最後の人生の選択肢みたいなものじゃないですか。【人生の岐路という認識】。(Bさん)

大学は4年間限定の学びの機会であり、その後の人生はさらに長く続いていくはずである。学生とその後の人生の接点が就職活動であり、就職先は自分の取り組み次第で道を拓くことができる。そして就職により、その後の人生を変えられる。そのために就職は人生最後の選択肢であるから失敗しない選択をしたいとの強い思いがある。定年まで一生働く就職先の選択であるからこそ、頑張り続けられるのだろう。

## 4. 総合考察

### 4-1. 大学生にとっての就職活動の意味づけの時間的变化

本研究によって得られたカテゴリー間の関連を、時間軸に沿って整理したものが図1である。時間軸に沿って、語られた内容をみると特筆すべき3つの変化が認められる。1) 学歴に対する考えの変化、2) 親の存在と意味づけ、3) 自己イメージの変化である。以下それぞれについて考察する。

#### 1) 学歴に対する考えの変化

就職活動を開始する前は、いわゆる一流大学出身者が有利であるとの思い込みがあり、学歴は中堅大学出身の自分にとって困難をもたらすものと認識されていた。就職試験の会場で他大学の人と挨拶を交わすと、「頭いい人ばかりでびっくりしました」などの思いが語られていたことから、本人は頭のいい人のカテゴリーには入っていないため社会的評価は低いと自分自身で捉えていた。さらに、実際に試験を受ける中で試験官から「何でその大学なの」という問いかけをされた際には、「見下された感じがした」との思いを抱いたことから社会的に自分の出身大学が有利に働かないという確信し、学歴は自分にとって不利益をもたらすものという思いがより強化された。

内定を得るまで自分が考えていたより長く時間を要し就職試験を受け続ける中で、「自分らしさを出せるようになった」と面接スキルの向上を感じると共に、学歴に対するコンプレックスは矮小化の方向に変化していった。

加えて二部の学生は、「二部って言うといいイメージ無いと思っていて、一個目内定もらったところは二部って言わないで内定もらった」と自己の経歴に対し、学歴は出身大学だけでなく夜間部であることも不利になるとの思いを抱いていた。また就職試験を経験し始めても「人柄も見ている」との父親の意見に、所詮は「学歴重視」だと半信半疑、もしくは違うと感じていた。しかし面接官の「働きながら勉強して偉いね」との声かけや、結果として二部と書いて内定が得られたことなどから「人柄重視の面もあるかも」と、学歴のみが重視さ

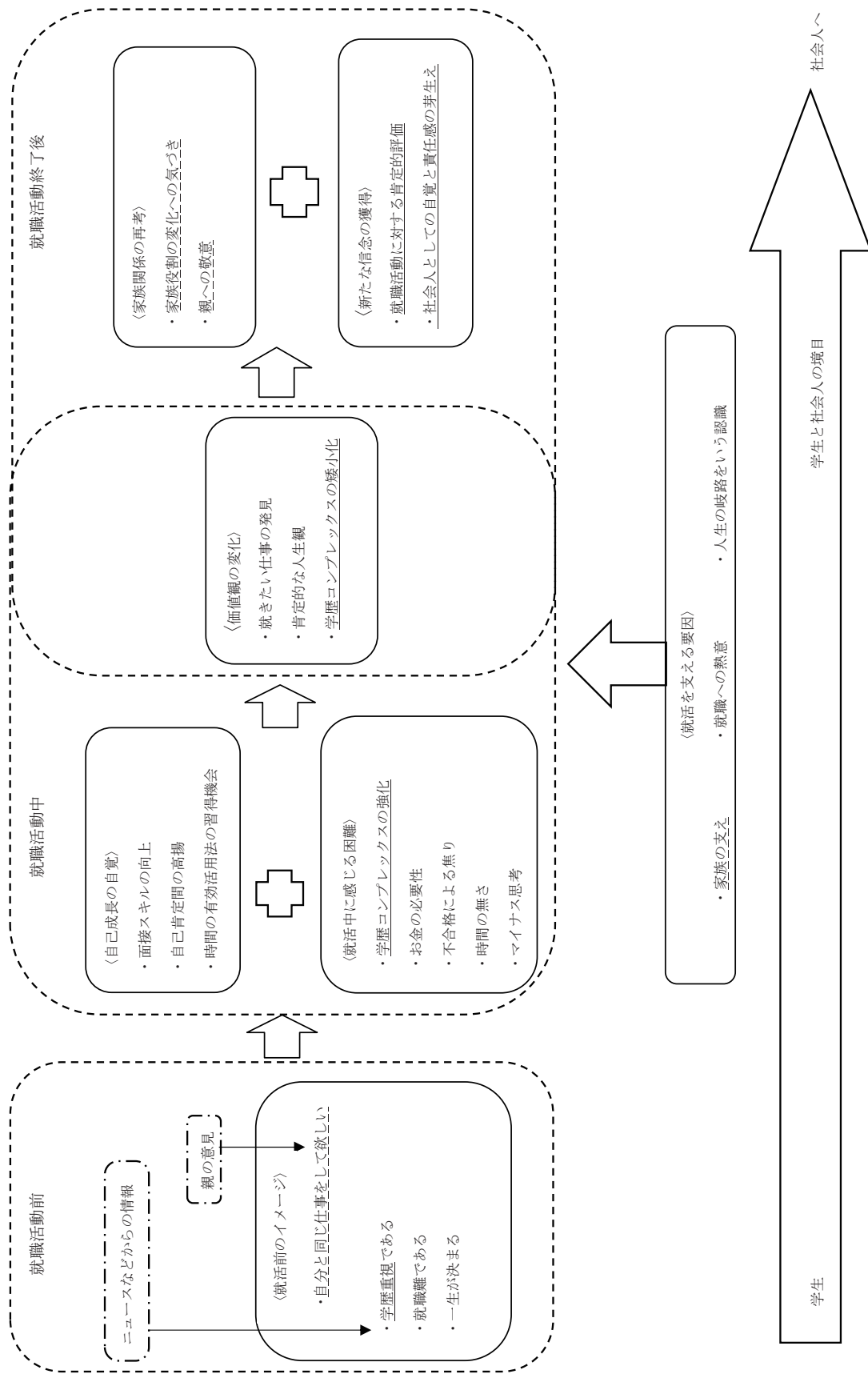


図1 学生の就職活動における受容プロセス

れているのではないとの思いが生じ、学歴重視のイメージは揺らいでいる。人柄重視に関しては、内定獲得学生は「人柄」要件の評価が大きいことを実感しているとの指摘がある（独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2007）。同じことがAさんの「人柄も求められている」との語り、Bさんの「面接に自分らしさを出せるようになった」との語りからも伺われた。最終的には、それぞれが希望の職種に内定したこともあり、出身大学や課程ではなく個人の評価であるという新たな信念をも獲得している。学歴コンプレックスは完全になくなることはないが、出身大学という学歴だけが全てではないことを確信することで、自己肯定感は高くなり自己イメージが肯定的なものに変化していると思われる。

## 2) 親の存在と意味づけの変化

就職活動をする中で、身近な社会人として親の存在についての意味づけにも変化がみられた。特に、Aさんの父親への思いは、元々尊敬していて仲も良かったとのこともあり、尊敬の念が強くなり自身の職業選択に大きく影響している。父親の後ろ姿を追うことで、改めて先輩社会人としての父親と、生活を支える存在としての父親という今まで気づかなかった父親の一面に気づいている。さらに自分の就職と父親の定年という家族役割に変化が生じることへの気づきも語られている。これは扶養されていた存在から、逆に家族を支える存在としての自分への変化が、より意識されたと思われる。これらは個別の語りを詳細に分析したがゆえに明らかになった親への思いと、その変化であると考えられる。

一方、Bさんは、「公務員なんて…楽な仕事で給料安い」という父や兄に対し、自分の職業選択の基準は違うため「はねっかえりが強くなった」と語っている。母親に対する反抗的な言葉は語られず母の存在は受け止められていたようだった。高澤（2012）によれば、青年後期になると、両親の欠点や短所には批判をするが、同時に両親の成育史や現在の環境などにも目を注ぎ、同情や共感もできるようになるという。また反抗も盲目的な衝動によるものではなく、自律的な価値観に従って批判する形をとるようになるとも指摘される。Bさんの語りは高澤（2012）の見解に整合的であり青年期ならではの心性と考えられた。

しかし、役割モデルとして同性の親の姿を追い、同じ職業を選択し、更なる敬意を表すAさんと、異性の親への価値観の違いへの反発を表すBさんの違いは、男女による違いなのか、個別なものなのか、Uターン就職か否かなどの条件によるものかは今回の調査では明らかにできなかったため今後の課題となろう。

## 3) 自己イメージの変化

進路決定者に関しては、内定という客観的評価のみならず、自分の就職活動結果を自分自身ではどう思っているかという主観的な評価も結果指標として重要とされることは本論冒頭においても述べた（佐藤2016）。進路決定行動を積極的に遂行したか否かが、進路決定先へ



の満足度に影響するとも指摘される。本研究の協力者も、就職活動の結果として内定獲得という客観的な評価を得ている。さらに、就職活動開始前や活動中にはマイナスと感じられていた就職活動が、最終的にはマイナスは無いと肯定的に評価されるように変化している。つまり、本研究の協力者にとって、就職活動は、客観・主観両面からポジティブなものとして評価されていることになる。

この就職活動についてのマイナスから肯定への変化の中で、彼らの自己イメージも大きく変化している。就職活動開始の頃は自信がなく自己肯定感が低かったのが、就職活動において自分自身と向き合い、自分に欠けている部分に気づき、時間にも追われつつ前向きかつ積極的に就職活動に取り組むことで、最終的に希望していた結果を手に入れることができたという経験が、自己を受容し自己肯定感を上げることに繋がっている。

加えて、就職活動を学生と社会人との境目である期間、社会人としてのルールを学ぶ機会として位置づけるなど、社会人としての自覚が芽生えており、学生としての自己から一歩進んで、社会人として働く自己へと移行が経験されていることが窺われる。

#### 4-2. 本研究のまとめと今後の課題

学生にとって就職は一生を左右する大きな出来事であると受け止められている。就職活動をする中で困難と向き合うことは、自分自身を見直し新たな気づきを見出す契機となっている。また就職活動に関する価値観は就職が内定することも影響し、負から正へ転換している。また学歴（出身大学や課程）に関する不安は、就職活動をする中でも継続するが、次第に学歴だけが大切なことではないと気づき、小さなものへと変化していることが明らかになった。困難に向き合うことで、新たな信念の獲得や家族への思いを新たにすることも明らかになった。

就職活動は自分自身と今後の人生とに向き合う機会であり、学生から社会人へと移行する過程である。その過程の中で様々な困難を乗り越え、自分を捉え直し社会人へと変化する機会という意味を持つと考えられた。就職活動を経験した学生に個別にインタビューしたことにより、時間軸の中での3つの変化を経験し、自分を捉え直していくことを明らかにすることができた。就職活動は、今までの人生で経験しなかった困難や自分と向き合う機会を学生にもたらしけていたのである。

しかし今回の調査対象者は希望する一般企業と公務員にそれぞれ内定している2名である。対象数が何よりも2名と少ないため本研究の結果には大きな制限がある。ケース数を増やすことで、大学生の就職活動のもつ意味や特徴をより精緻化することが今後の課題となる。加えて先行研究の検討を十分に行うことで、より深いレベルの考察に到達させることも課題である。

謝辞 本研究に当たり忙しい中インタビューに、快く応じてくださいました学生さんに心

より感謝申し上げます。また、データ収集から論文執筆までご指導いただきました谷口明子先生に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 大学Times.よくわかる夜間部基礎講座その4 就職・進学”夜間部出身を活かした”就職・進学  
〈<http://times.sanpou-s.net/yakan/lecture/4.html>〉(2016年9月6日)
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構. (2007). 労働政策研究報告書大学生と就職—職業への移行  
支援と人材育成の視点からの検討—,78,13-86
- 濱中義隆 (2007). 第1章現代大学生の就職活動プロセス. 著: 小杉礼子, 濱中義隆, 堀友喜衣, 中島ゆ  
り, 大学生の就職とキャリア「普通」の就活・個別の支援 (pp.17-50). 勁草書房.
- 萩原俊彦 (2011). 児童・青年のキャリア形成を促すキャリア教育—心理学ワールド—55, 9 - 12.
- 服部泰宏・新井康平 (2015). 内々定獲得率へ与える影響についての経験的研究: コックス比例ハ  
ザードモデルの適用 横浜国立大学経営学部ワーキングペーパー, 322.
- 輕部雄輝・佐藤純・杉江征 (2015). 大学生の就職活動維持過程尺度の作成 教育心理学研究,  
63,386-400
- 経済産業省 (2006). 社会人基礎力・経済産業省 〈<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>〉  
(2016年09月6日)
- 厚生労働省 (2014). 平成25年度若年者雇用実態調査の概況. 厚生労働省大臣官房統計情報部雇用・  
賃金福祉統計課 〈[www.mhlw.go.jp/.../4-21c-jyakunenkokoyou-h25\\_gaikyou.pdf](http://www.mhlw.go.jp/.../4-21c-jyakunenkokoyou-h25_gaikyou.pdf)〉(2016年9月6  
日)
- 永野仁 (2005). 就職活動成功要因としての就職意識—大学生の分析調査— 政経論叢,73,93 - 113
- 佐藤舞 (2016). 大学生の就職活動および自己効力の縦断的研究. 教育心理学研究 64, 26-40
- 高澤健司 (2012). 若松養亮・下村秀夫 (編) 詳細大学生のキャリアガイダンス論—キャリア心理学  
に基づく理論と実際—第7章社会人になるとはどういうことか (pp.90 - 106). 金子書房.

# **What kind of meaning does job hunting have for university students?**

## **— The results of semi-structured interviews with two students —**

WATANABE, Etsuko

### **Abstract**

Keywords: university student, job hunting, the meaning of work, career education, career development

For college students, job hunting is a significant life event towards their adjustment to becoming responsible working members of society. Is the meaning of job hunting just simply to gain employment? The purpose of this study was to conduct two semi-structured interviews with the objective of understanding the meaning of job hunting for two university students. The interviews identified the change process regarding the students' ① thinking regarding their academic records, ② understanding of the meaning and significance of their parents, and ③ individual self-concept. First, prior to beginning their job hunting, they believed that, because job hunting is difficult and that academic records would be given priority, they were at a significant disadvantage. However, as these students experienced job hunting setbacks and were forced to self-reflect, they became mentally stronger. As a result, they learned to manage their time more wisely, reflect upon the kind of job they truly desired, and upon finding employment, viewed their success as not simply the result of their academic records but also a consequence of their personal efforts. Furthermore, they experienced their parents as both pressure and support. Lastly, successfully obtaining a job led to their sense of being accepted by society, and an improved self-concept. A detailed analysis of the interviews resulted in the identification of the process of change experienced by students engaged in job hunting.